



『亀山 本徳寺 1』

本徳寺を案内する簡単な絵図『ぶらり まっぷ』には秀吉と戦った民衆のとりで、と書かれています。大門の左右には高さ3m幅2mの塀がお寺を囲んでいます。大門の前には目隠し塀が設置され外からは内部が見えないように、又鉄砲で狙撃されないように守られています。大門をくぐり塀に沿って右に歩くと三階建てほどの高さを持つ太鼓櫓が聳えています。敵の攻撃を見張り、攻撃されそうになると太鼓を打って、住民に危険を知らせます。左には特大の梵鐘が鐘楼にぶら下がっています。この梵鐘には『南無阿弥陀仏』の名号が大きく陽鑄されています。その重量は

650貫目(約2.4トン)です。梵鐘も太鼓同様、中世の情報通信機器で鐘の打ち方で信号を送っていたのです。有線放送の大きなスピーカーの無かった昭和初期までは消防小屋の横には、『火の見櫓』の上に火事など異変を知らせる半鐘が取り付けられていました。

境内の正面には立派な本堂が見えます。この本堂には新撰組の刀傷が残っています。『どうして新撰組が姫路へ?』これには深い訳があります。その話を本徳寺の文書『西本願寺・北集会所が本徳寺に移築された経緯』によって紹介しましょう。(一部改変)

英賀にあった本徳寺は天正8(1580)年4月に、英賀城が秀吉に攻められた時、本徳寺も焼失しました。その年の9月に300石の寺領寄進状が秀吉から発行されています。英賀御堂はなくなりましたが、以後、亀山本徳寺は浄土真宗の西国における重要な布教拠点となりました。亀山本徳寺は、嘉永3(1851)年(※)、安政の大地震のため、本堂が大破し、その後直ちに再建が進められ、慶応3-4(1868)年にほぼ完成を見るに至ったが廃仏毀釈、世情不穏のおり大工小屋から出火、新築本堂と中宗堂が灰燼に帰した。播州における本願寺行政に支障をきたすため、本願寺派は学林(龍谷大学)の大講堂に予定されていた北集会所の用材をもって本徳寺の本堂に当てることを決めた。この北集会所は元治2(1865)年から慶応2(1865)年まで新撰組の屯所として使われました。資材は海路運ばれ、三年の歳月をかけて移設され、明治6(1873)年3月に移築完成を見た。

棟瓦には、本願寺・阿弥陀堂と同様『紀州鷲森御坊講中・河州無量光寺門徒中』の寄進名が陰刻され、床板の裏には本願寺名を墨書した床材が使われている。伝承は本山よりの解体資材が海路飾磨津に運ばれ、同行の手渡しにより、飾磨街道を經由して、亀山に運ばれたことを伝えている。また、北側二本の柱には刀傷が残り、新撰組の占拠跡を生々しく物語っている。

※ 嘉永3(1851)年ではなく嘉永7(1854)年、この年の11月に安政に改元されたので、と思われる。

<http://www1.winknet.ne.jp/~k-goboh/>



『鉄のふしぎ博物館』
来て!見て!ふれて! ふしぎ体感
鉄を見る目がかかりますよ。
ぜひお越しください。